はじめに

五大院安然(八四一~八八九~、

一説九一五没)

の撰述した『諸阿闍梨真言密教部類総禄』、

所謂

『八家秘録』

## 安然引用の 『即身成仏義』 『四種曼荼羅義』 について

所 弘 淳

別

曼荼羅義』・『文字実相義』は、安然の『真言宗教時義』(以下、 巻上には、「真言宗即身成仏義四種曼荼羅義文字実相義一巻」という記述がみられ、この『即身成仏義』・『四種 方で安然所引の であることが既に明らかになっている。 『菩提心義抄』)等に引用されている。そのうちの『文字実相義』については、安然の引用文から『声字実相 『即身成仏義』に関しては、 空海 (七七四~八三五) 『教時問答』)や『胎蔵金剛菩提心義略問答抄』(以 撰述の 『即身成仏義』 だけでなく、

そ

義

であると考えられていた時代もあったが、現在では偽撰説が主流となり、 の『即身成仏義』にはみられない内容を含むものが散見される。また『四種曼荼羅義』に関しては、空海の撰述 空海直後に成立したという説や、

現代密教 の口説に基づいたものであるといった様々な見解が示されている。

とであり、『十住心論』や『秘蔵宝鑰』などと共に、安然教学が形成される上で必要不可欠な著作であったとい って過言ないであろう。ただし、安然が『十住心論』・『秘蔵宝鑰』を引用する際は、例えば『教時問答』巻二に |高野海和上、宝鑰及十住心論明||十種心|。]| とあるが如く、空海の撰述であることを明記しているにもかかわ しかしながら、この三著を安然が重要視していることは、『教時問答』や『菩提心義抄』をみれば明らかなこ

念誦成仏儀軌』の文が引かれていることから、『即身成仏義』の空海撰述を疑問視した研究があることも事実で ある。また、特に『即身成仏義』には、 らず、『即身成仏義』・『四種曼荼羅義』・『声字実相義(文字実相義)』を引用する際には撰者名を明記しない 空海撰 『御請来目録』にはみられない 『金剛頂一字頂輪王瑜伽一切時処 、ので

ある。

く考察してみたい。 る。そこで本稿では、 このように安然の引く空海撰とされてきた著作には、現在においても議論の絶えない種々の問題があるのであ 安然の引く『即身成仏義』・『四種曼荼羅義』に焦点を絞って、これらの問題について少し

# 二、『即身成仏義』・『四種曼荼羅義』の種類

第四輯に収録される六本の異本と称される『即身成仏義』の計七本を確認することができる。これを示せば以下 『即身成仏義』を挙げてみるに、『弘法大師全集』 第 一輯に収録されている 『即身成仏義』 の他に、 下の如くである。

『四種曼荼羅義』

(以下、『四曼義』)

- の如くである。
- 2 『即身成仏義』(以下、正本 『真言宗即身成仏義』(以下、 『即身義』) 異本『即身義』

3

『即身成仏義』(以下、

異本

『即身義』二)

- 4 『真言宗即身成仏義』(以下、異本『即身義』 (8) 『即身成仏義』(以下、異本『即身義』四)
- 6 (5) 『異本即身成仏義』(以下、異本『即身義』 <u>£</u>10

ている。また、『日本大蔵経』第八三巻所収の安然撰とされる『異本即身成仏義』 このうち、異本『即身義』三〜異本『即身義』六については、 『真言宗即身成仏義』(以下、異本『即身義』六)

7

法大師全集』第四輯所収の異本『即身義』五と同じであることが確認できる。

次に 『四種曼荼羅義』 は、『弘法大師全集』 第四輯に二本収録されていることが確認される。 これを示せば以

2 整理したものといえる。また、安然が『四種曼荼羅義』として引用する文の内容は、 尚、 『四種曼荼羅義口決』(以下、『四曼義口決』) 『四曼義』と『四曼義口決』は大同小異の内容であり、『四曼義口決』は雑多な

『四曼義』を項目分けして

『四曼義』

]:『四曼義口決』

ほぼ同じ内容のものであることが既に確認され

が存在しているが、これは

現代密教

のどちらにもみられるが、『四曼義口決』 の項目順に引かれていることを鑑みるに、安然は

『四曼義口決』、

は後述する目録にみられるように、『四曼義口決』に類する著作を見ていたのだと考えられる。

そして、院政期に制作された空海撰述の目録をみるに、済暹(一〇二五~一一一五)は五本の『即身成仏義』

は七本の『即身成仏義』と五本の

『四種曼荼羅

と四本の 『四種曼荼羅義』を、また覚鑁(一〇九五~一一四三)

①済暹『弘法大師御作書目 義』を挙げている。

録6

即身成仏義五本衛

四種曼荼羅義四本各別

② 覚鑁 『大遍照金剛御作書目

四種曼荼羅義五本之内

四種曼荼羅義三本各一卷

四種曼荼羅義問答一

巻

四種曼荼羅義口決

即身成仏義七本之内

即身成仏義三本各一卷

真言宗即身成仏義問答一巻

即身成仏義二巻上

真言宗即身成仏義

即身成仏義章一

るのである。また同様に、 『弘法大師全集』所収の『即身成仏義』 表題の異なるものや巻数の異なるものがあり、 『四種曼荼羅義』についても、『弘法大師全集』に収録される二本の『四種曼荼羅義』 | は前述した如く七本であるが、覚鑁の示す『即身成仏義』七本と比較す 現存しない『即身成仏義』が存在していたことが確認され

— 152 —

以外 れた頃には、 0 『四種曼荼羅義』 現在では偽撰とも見做されている異本『即身義』 があったといえるのである。 また更に付け加えるならば、 P 『四種曼荼羅義』 が、 これら院政期 既に空海の著作であると 郊の目 録が 制

安然引用の 『即身成仏義』・『四種曼荼羅

認識されていたのである。

## (一) 『即身成仏義

問答』と『菩提心義抄』とに見ることができる。そこで『教時問答』巻四をみるに、 では、 安然の引用する 『即身成仏義』について検討していきたい。まず安然が引く正本 『即身義』 は、 『教時

問、 |種秘密身|。 四種曼荼羅身委細云何。 謂字・印・形像。字者法曼荼羅。印謂種種標幟、 答、略明二大綱一。恐」繁不」広。 如;;即身成仏義云;、 即三昧耶曼荼羅。 形者相好具足身、 大日経説、

剛嚩発生成」印亦名,|三昧耶智印|。三法曼荼羅。本尊種子真言。若其種子字各書,|本位 印」。二三昧耶曼荼羅。 大曼荼羅。 此三種身各具,,威儀事業,。是名,,羯磨曼荼羅,。 謂一一仏菩薩相好身。又綵,|画其形像,名,|大曼荼羅,。又以,|五相, 即所」持標幟刀剣・輪宝・金剛・蓮華等類是也。 是名;,四種曼荼羅;。 若画』其像 若依 成一本尊瑜 金剛頂説 |亦是也。又以」手和合金 |是。又法身三摩地及 伽。又名 四種曼荼羅者、

として、『即身成仏義』 磨智()。 切契経文義等皆是。亦名,,法智印,。四羯磨曼荼羅。 を四種曼荼羅の説明のために引用している。これは正本『即身義』 即諸仏菩薩等種種威儀事業等。若捏等亦是。 の本文とは僅かな違 亦名

いがみられるものの、

正本

『即身義』

から引かれたと見てよいであろう。

即大曼

切如

来有

『菩提心義抄』巻一においても

間 正等正覚」也。 一い知耶。 もらでそれ三藐三冐駄野 | 者、此云 | 正等覚者 | 也。若説 | 菩提 | 文云 | 「ももでの三藐三冐地 若菩提与言冒地 問、 **₹**を沒駄正云」覚者、是能覚者。**₹**♥冒地正云」覚也。是所覚法故。 若尓、 同也。 何故彼成仏義云上刊的书で《三藐三冒地古翻 菩提正云」覚者、何故即身成仏義云;, ◀ を 没駄 ▼ ♥ 冐地一字之転。 | 遍知 |新訳||等覚|。覚与」知義相渉 大仏頂等帰命諸仏中云 没駄名」覚冒地 者、 此云

諸文分明。故知、彼成仏義誤矣。

仏義釈,,十界,中具列,,地獄等十,。」との記述がみられるのである。この十界については、 とあるように、「没駄」や「冒地」といった語の訳語説明のために正本『即身義』 られない主張であるにもかかわらず、この文を『即身成仏義』が根拠とするのである。 しかしながら『菩提心義抄』巻一には、「即身成仏義明;;地獄等十法界;。」とあり、更に同巻二にも、「即身成 を引いている。 正本 『即身義』

この十界については、『声字実相義』に、

六一切人界、七一切阿修羅界、八一切傍生界、九一切餓鬼界、十一切捺落迦界。 (s) 次十界具, |言語 | 者、謂十界者、一一切仏界、二一切菩薩界、三一切縁覚界、四一切声聞界、 五一切天界、

すことはできないのである。 の引用として扱っているのである。つまり、安然のいう『即身成仏義』を、 いう先行研究が存在する。しかし と説かれていることから、安然が『声字実相義(文字実相義)』を誤って『即身成仏義』としたのではない 『教時問答』巻四では、 上記の『声字実相義』 単に『声字実相義』の誤りだと見做 の記述を、『文字実相義』 かと

ここで異本『即身義』二をみるに、

にはみ -154 - 問、

若四身各具;;四曼

問 十種法界加持亦有」種。 答、 且於 ||摩訶曼荼羅||有||十種加持 . 問、 何。 答、 一仏法界、 二菩薩、 三縁

四声聞、 五天、六人、七阿修羅、 八傍生、九餓鬼、 十地獄也。

十界についての記述がみられるのである。従って、

これは安然の記述通り、

『即身成仏義』、

正

というように、

身義』二を引く故、『菩提心義抄』 には異本『即身義』二からの引用であると言った方が適切であると考えられるのである。また、安然が異本 の撰述以前に異本『即身義』二は既に成立していたと考えられるのである。 即即

#### $\widehat{\equiv}$ 『四種曼荼羅義

引かれていることが確認できる。 次に、安然の引く『四種曼荼羅義』について検討していきたい。『四種曼荼羅義』については、 『教時問答』に

ともいえるべき主張を展開する。その上で、以下の問答を設けるのである。 四身一一各有,;大・三・法・羯四種曼荼羅身,。且自性身是為,;一切心色之体,故、 安然は『教時問答』巻三において、「四身互具、四身、」という自身の仏身観を主張し、更にそれを発展させ、「此 具 ||四曼|。」と「四身互具四曼|

大・羯・三如」次自性・受用・変化・等流。何者、自性身即法身故、法曼荼羅為||自性身||。大曼荼羅有||自受・

|者、違||四種曼荼羅義文|。如||彼文云|、四種曼荼羅配

四種身

有言三意

初意、

他受二義,故、名,,受用身,。羯磨曼荼羅是業用故、 大・三・羯・法如」次四身。何者、 大曼荼羅亦名,,法身,、此之法身即自性身。三昧耶曼荼羅是大曼荼 曰||変化身|。三摩耶曼荼羅平等流類義故、 名

次意、

羯如」次四身。 羅身之所;;受用 何者、 故。 事業威儀曼荼羅是業用即変化故。 三昧耶曼荼羅是法界体性故。 法曼荼羅是大曼荼羅身之所,,受用,故。 法曼荼羅是有,,平等流出義,故。 後意、 大曼荼羅是五大色 三・法・大・

このように 所」変故。 『四曼義口決』を用いて、 羯磨曼荼羅是業用即等流故。 四種曼荼羅を四種法身に配当することに三種あること、 答、彼文且約二差別義 説。 今約||無差別義 すなわち、

現代密教 ②「自性身に大曼荼羅、受用身に三昧耶曼荼羅、 「自性身に法曼荼羅、受用身に大曼荼羅、変化身に羯磨曼荼羅、等流身に三昧耶曼荼羅」 変化身に羯磨曼荼羅、等流身に法曼荼羅

「自性身に三昧耶曼荼羅、受用身に法曼荼羅、 変化身に大曼荼羅、 等流身に羯磨曼荼羅

という『四曼義口決』の思想を提示するのである。その上で、『四曼義口決』 の思想を差別的な立場、

を平等 (無差別) の立場と捉えるのである。

四種曼荼羅義云、

釈」名、

問、

梵漢如何。

答、

摩訶翻」大。三昧耶翻||平等|。

羯磨翻]

事業威儀

達摩翻

自身の説

||大曼荼羅|。

世出世間一切器界摂川平等」也。

世出世間

更に同巻四には

(中略) ……四種曼荼羅摂,,一切法,。世出世間内外一切教、一切法摂,,法曼荼羅,。 切事業摂,,事業, 気(33) 世出世間一切有情

すなわち、『四曼義口決』の「釈名出体」・「形像真実相対門」・「三宝相摂門」・「四種曼荼羅相摂於四種法身門」・ として四種曼荼羅について論を展開するのであるが、実には、これはすべて『四曼義口決』の取意なのである。

迷悟差別門」・「万法摂尽門」という項目に説かれる思想を、 以上の事から、安然が四種曼荼羅の思想を構築する上で、『四種曼荼羅義』を相当に高く評価していることが そのまま安然が継承しているのである。

理解されるであろう。

## 「即身成仏義」としながら 『四種曼荼羅義』 を引く文章

引用であることが散見される点である。すなわち『菩提心義抄』巻二には、 しかしここで問題となるのは、 安然が「即身成仏義に云く」としながらも、 実際には 『四種曼荼羅義』 からの

問、 何名,,大・三・法・羯四種曼荼羅,耶。 答、此有二二文」。 …… (中略) …… 若即身成仏義約 仏内 証及行

者行法 羯曼荼羅釈」名云何。 大日経説、 答、 切如来有,,三種秘密身,。……(中略)……亦名, 如::/彼義云:、梵云::|摩訶 |此云」大。即是五大。 五大色遍;;一切処;故云、大也。 |羯磨智印 問、 大・三・法 枕

云,,三昧耶,此云,,平等 刺則軌持義 |無比味無過上味 | 。梵云 | | 枳攘母捺羅 古云」壇。 問、 菩提心論云、 |故云」法也。梵云;|羯磨|此云;|事業威儀|。即是隨;|事業|威儀各別故云;|事業威儀| 壇者坦也。 即是五大遍川有情非情 從」凡入二仏位」者即此三摩地者、 坦然而平也。 是義偏、 此云 而平等成故云,,平等,。梵云,,達摩,此云、法。 |智印 | 。 不,,具足,。新云,,輪円具足,。 智者、 能達||諸仏自性 簡択決了義。 -悟 印者、 古坦然之義、 |諸仏法身|、 決定不改義。…… 即是諸尊種子字。 在 証 |此義中|。 梵云: 法界体

義云、 ||法曼荼羅 如 次四身 🕉 …… 成,,大毘盧遮那仏自性身・受用身・変化身・等流身, \*。 此有;;三意;。 世間出世一 中 略) 切人摂;;大曼荼羅;。 法·大·羯·三如、次四身。二、大·三·法·羯如、次四身。 : 問、 以二三種世間 世間出世所依器界摂川三昧耶曼荼羅」。 摂 |此四曼|云何。 以二此四身 答、 相 彼義云、 |配四種曼荼羅| 世間出 世 間 出 三・法・ 世間内外教法摂 世 云何。 切事 大・羯

との記述がみられるのである。 れ る 彼義」 (棒線以下) の内容は、 この内、 正本・異本 冒 頭の問答に関しては、 『即身義』 諸本の全てに見ることができず、 正 本 『即身義』 の引 用であるが、 実際には その 後に 『四曼義 引か

口決』 かわらず、 の内容なのである。

したか、

或いは

現代密教 正本『即身義』を指すべきなのである。したがって、安然が『即身成仏義』と『四種曼荼羅義』とを誤って表記 ここで問題となるのは、『菩提心義抄』において、『四種曼荼羅義』を引用するのが唯一ここのみであるにもか 初めて引用する書物を「彼義」と表現する点である。つまり、この「彼義」は直前の引用、すなわち

『四種曼荼羅義』の内容を含む『即身成仏義』が存在していたことが推測されるのである。

### 四 正本・異本『即身義』にみられない 『即身成仏義』

また安然は、現存する正本・異本『即身義』には見られない思想の含まれた『即身成仏義』をも引いてい

金剛界大法対受記』巻八には

五大也。謂以||識大|覚||五大 大日経云、我覚||本不生|出||過語言道|。即身成仏義云、六大常住曼荼羅。我覚是識大也。 故云云。 出過語言等句是

正本・異本『即身義』には説かれず、また『四種曼荼羅義』にも見られないのである。また『教時問答』巻一に とある。これは、正本『即身義』に引用される『大日経』の文を、六大に配当するものであり、一見すれば正本 |即身義|| の取意と見做すこともできるのであるが、「六大常住曼茶羅」、や「以,|識大,覚,|五大,」という思想は、

おいても

三密六根、 六大若種、 問、大・三・法 十界身分、陰入界等、是羯磨法身。真如体性具,|四法身|、是法性身。諸仏同体以,|四法身|互受| 若色、皆是大法身。 羯其相云何。 一切有情非情形色、 答、 如…即身成仏義説 是三摩耶法身。一切名句文身義理法門、 |地・水・火・風・空・識六大常住曼荼羅法界 是法法身。 一切 乃

として二頌八句を引用したうえで、

字仏

法楽」、是自受用。諸仏本願為 ||諸具惑菩薩 示;;現此四法身;、 是他受用。 諸仏大悲為 諸凡地 処処示 現 此

とあり、 [法身 ¡ 、是変化身。変化身中応||諸雑類 ¡ 、是等流身。 ⑵ 「六大常住曼荼羅」や、 四種曼荼羅を四種法身に配当する解釈が説かれている。 しかし、 大・三・法

羯の四種曼荼羅と自性・受用・変化・等流の四種法身との配当は、 『四種曼荼羅義』に見ることができるものの、

種法身を自性 ここでは更に、 (法性身)・受用・変化・等流の四種法身に配当する思想は、 四種曼荼羅を「大法身」・「三昧耶法身」・「法法身」・「羯磨法身」の四種法身としている。 『四種曼荼羅義』にも見られない この四 のので

ある。 更に 『菩提心義抄』巻一では

又凡夫即身成仏者、 問、 網名||即身| 鸒。 法然具||足薩般若 抑言 ||即身成仏|者、為ニ即於||一生|成仏ム。為||凡夫即身成仏|。 如 |即身成仏義云|、 一 成法仏○ 心数心王過 六大無礙常瑜伽棒。 || 刹塵 | 無数。各具, | 五智無際智 | 輪門。 四種曼荼各不」離相。 答、 両義俱得。即於,,一生,成仏 三密加持速疾現用。 円鏡力故実覚智所問 重重帝 如 が前

果 仏 問、 持速疾現者、 涉入義也。是挙;;法体;。 一即風大〇 |。彼義釈云、初六大者、大日経云、我覚||耶業本不生||耶集出| 頌意云何。 知言空等 修二三密行 答、若覚;;凡夫身中六大點默即是法界体性 ||虚空||即空关。 加持速現;;大日;。是拳;;法用;。 次四種曼荼各不離者、 如」是六大無礙相入常住不変故、云;無礙常瑜伽;。 大・三・法・羯四曼荼羅不離 次重重帝網名即身者、 一、即以....凡夫六大直成 |過語||三道||順字義。 諸尊三密与二我三密 諸過得 体。 瑜 |諸仏六大|故、 是举, 伽此 解脱 云\_相 |法相 即火大夫 応 名 円融無 次三 相 離於因 訓 一密加

応

猶如…帝網名

二即身

也。

是挙; 無礙

次言,,心数心王過刹塵,者、

心王者体性智。

心数者多一識智。

是举

= 無:

数 次各具五智無際智者、心王(心)数各具,,五智,無、有, \_ 際 限 \_\_。 是拳 |輪円|。 次円鏡力故実覚智者、 心

鏡寂照不倒不謬。是拳, ||所由|。此後四句共明||成仏|。

と、 二頌八句に対する説明を、「彼義釈」(棒線以下)なる著作を用いておこなっている。

現代密教 わざ「彼義釈云」とする必要はない。つまり、『大日経』の引用以降も「彼義釈」の文であると捉えるべきなの 文が『大日経』のみの引用であるとするならば、それ以降は安然の解釈と捉えるべきであるが、それならばわざ ここでまず問題となるのは、どこまでが「彼義釈」の引用なのかが不明瞭な点である。この「彼義釈」の引用

解釈は、 身成仏義』を指していると推測されるのであるが、ここに説かれる体・相・用の三大を法体・法相・法用とする 正本・異本 『即身義』には見られないのである。つまり、 現存していない『即身成仏義』 には前述の解

である。この「彼義釈」の直前には、『即身成仏義』が引かれていること、またその内容からも、「彼義釈」は

釈が説かれ、それを安然が用いていたと考えられるのである。

匹

の他に、 学形成において重要視してきたのである。しかし、安然の引用を見る限り、正本 以上 の如く、 現存しない『即身成仏義』を用いるのであり、更に『四種曼荼羅義』の思想が含まれる『即身成仏義 安然は、 空海撰述と見做されてきた正本・異本 『即身義』並びに 『四種曼荼羅義』 『即身義』・異本 を、 『即身義』二 自身の教

も使用していたことが推測されるのである。 また、安然の『即身成仏義』・『四種曼荼羅義』 の引用態度を検討するに、安然は数種類の

用しているにもかかわらず、それらを区別していない。この態度は、 例えば正智院道範(一一七八~一二五二) 『即身成仏義』を引

剅

が異本 『即身義』を引く場合には「一本即身義」とし、 中性院頼瑜(一二二六~一三〇四) の場合は 「別本」と

するように、正本『即身義』と異本『即身義』とを区別して表記することと明らかに異なるものである。

成仏義四種曼荼羅義文字実相義一巻」と一行で記されていることも考慮するに、安然在世時には、 もかかわらず、『即身成仏義』・『四種曼荼羅義』・『文字実相義(声字実相義)』の三著に関しては、「真言宗即身 これに加えて、『八家秘録』巻上における記述、すなわち『八家秘禄』が、通常は一著作一行で表記されるに 正 本

異本『即身義』・『四種曼荼羅義』がそれほど区別されていなかったと考えられるのである。そこから時代が下り、 済暹の頃までには、それぞれの著作が区別されるようになったと考えられるのである。 『即身義』・

を多分に受けているのである。 として空海の教説を批判している。 えで、「答、此海和上判 安然は、空海の『十住心論』や『秘蔵宝鑰』に対しては、例えば『教時問答』巻一に |華厳仏|為 |無明仏 しかし上述した如く、 |則有||三失|。 一違,|金剛頂,|失、二違,|大日経 『即身成仏義』や 『四種曼荼羅義』 『秘蔵宝鑰』 失、 三違 の教説からの影響 守護経 を引

と判じている。 また安然は、 龍樹摩訶衍論建||立十識|。八識如」常、 最澄(七六七~八二二) しかし、『教時問答』巻一には が 『守護国界章』にて偽論と判じた 第九一 切一心識、 第十一心一心識。若約二一切一心識」、 『釈摩訶衍論』 を、 最澄同様に偽論 則

若約 各識・各心。若約;;一心一心識;、 |清浄本覚・清浄始覚|、 一切諸仏一身・ 則一 切衆生一識・一心。若約一染浄本覚・染浄始覚」、一切諸仏各身・各体。 · 体<sup>49</sup>。

起信論中、 心真如門本有 = 平等・ 差別二義 心生滅門則有 三八識立 二九識 者、 取為 二九識 摩訶衍論為」頭

と説かれ、

また更には

現代密教 第26号

|其真如門平等・差別義|故、

更開為」二。名為,,一切一心識、一心一心識,。故非

||師資違害|、

是能釈

起信

論<sup>60</sup>

が空海教学を批判しつつも、それ以上に空海や空海撰述と見做されていた著作からの影響を、 とも説かれているように、安然は 日本において安然以前に 『釈摩訶衍論』の教説を高く評価し、自身の著作に用いたのは空海なのであり、安然 『釈摩訶衍論』の十識説を高く評価しているのである。 最澄や円仁といっ

た祖師の教説同様に、多分に受けた学匠であったといえるのである。

(キーワード) 空海 即身成仏義 四種曼荼羅義 安然

(1) 『八家秘禄』巻上(大正五五・一一一六頁中)

例えば、真保龍敞「四種曼荼羅義の成立について」(『印仏 研』一九―一)では、『四種曼荼羅義』を「空海口説・真

済記」としている。

3 4 『即身成仏義』の撰者問題に関しては、大久保良峻「安然 『教時問答』巻二(大正七五・四〇〇頁下)

所収・三〇二~三一三頁・法蔵館・二〇〇四) による空海撰『即身成仏義』の受容」(『台密教学の研究』 等、 参照。

5 『即身義』 (弘全一・五〇六~六二〇頁

6

『即身義』

一(弘全四・一~九頁

7 『即身義』二(弘全四・一〇~一五頁

8 『即身義』 三 (弘全四・一六~三六頁)

10 9 異本 異本 『即身義』五 『即身義』四 (弘全四・五七~七七頁) (弘全四・三七~五六頁)

11 12 異本 『異本即身成仏義』 『即身義』六 (日蔵八三・五〇~五八頁) (弘全四・七八~八七頁)

13 『四曼義』(弘全四・二五〇~二五八頁) 『四曼義口決』(弘全四・二五九~二七一頁)

15 14 真保前揭論文参照。

16 『弘法大師御作書目録』

『大遍照金剛御作書目録』 (弘全五・六七四頁 (興全下・一四五四頁)

22

この正本

『即身義』

の文については、

安然が「彼成仏

32 31 30

正本『即身義』(弘全一・五〇八~五〇九頁

ると指摘している。この安然の主張については、道範(一 義誤矣」として、空海の「三藐三冐地」の解釈を誤りであ

……安然菩提心義引 |今文 | 、仏陀菩提是能覚・所覚也

七八~一二五二)

が

『即身成仏義聞書』巻上において、

❤ ●所覚即法也。 ……

(を能覚者即人也。

- 19 頂経説、 曼荼羅。 四種曼荼各不離者、 儀事業」。是名,羯磨曼荼羅」。是四種曼荼羅。若依 謂字・印・形像。字者法曼荼羅。 ||画其形像|名||大曼荼羅|。又以||五相|成 形者相好具足身、 四種曼荼羅者、一大曼荼羅。謂一一仏菩薩相好身。 大日経説、 即大曼荼羅。此三種身各具;;威 一切如来有,,三種秘密身 印謂種種標幟、 ||本尊瑜伽 即三昧耶 ||金剛
- 23 『菩提心義抄』巻一(大正七五・四五九頁下)

る

と批判するなど、後の東密学匠にも注目されるところであ

即身成仏義聞書』巻上

(続真一七・一五頁上)

安公貪道之才、豈及;;大師無窮之智;耶。可ゝ察」之。

- 24 『声字実相義』(弘全一・五二五頁 『菩提心義抄』巻二(大正七五・四九一頁下)
- 26 25 幸田宥吽・跡部正紀「異本即身義解説」(『定本弘法大師全

即諸

- 27 集』巻三・三七六~三八二頁
- 「教時問答」巻四 (大正七五・四三一頁下)
- 28 異本『即身義』二(弘全四・十二~十三頁
- 29 『教時問答』巻三(大正七五·四二○頁上
- 「教時問答』巻三(大正七五・四二〇頁中
- 三意」。初意、法・大・羯・三如」次自性・受用・変化・ 四種曼荼羅相,|配於四種法身,|不。… 『教時問答』巻三(大正七五·四二〇頁中~下) (中略) …於
- 他受用二義」故、 身即法身故、 三·法·大·羯如」次自·受·変·等。… 等流。次意、大・三・羯・法如」次自・受・変・等。 法曼荼羅為,,自性身,。大曼荼羅有,,自受用 名,一受用身,。羯磨曼荼羅是業用義故、 (中略) …自性  $\Box$

「教時問答』巻四(大正七五・四三七頁中~下) 0

レ思如何。

於二梵語一

而云,,一字転覚知義涉,者、

即身義謬文取意。 字 | 転声有||通

仍所釈旁難 別二義

……(中略)……次仏陀義簡別釈、

安然不」知||此通別義|、

唯以,,一辺義,輒言,,大師謬

0 而

転声義別釈也。

18

21 20 種子真言。若其種子字各書,,本位,是。又法身三摩地及一 ● \* \* \* \* \* \* 一字之転、 切契経文義等皆是。亦名,,法智印,。四羯磨曼荼羅。 合金剛縛発生成」印亦名,,三昧耶智印,。三法曼荼羅。本尊 金剛·蓮華等類是也。若画,,其像,亦是也。又以,,二手,和 おもれての者、古翻||遍知|新訳||等覚|。 覚知義相渉故 仏菩薩等種種威儀事業。若鋳若捏等亦是。亦名,羯磨智印,。 又名,,大智印 , 。二三昧耶曼荼羅。即所 、持標幟刀剣・輪宝 『菩提心義抄』巻一 正本 『即身義』(弘全一・五一二~五一三頁) ₹を名」覚▼@日」知。故諸経中所」謂 (大正七五・四五二頁下)

曼荼羅是法界体性故、 是有,,平等流出義,故、名,,等流身,。…(中略)…三昧耶 事業威儀曼荼羅是業用即変化故、名,,変化身,。法曼荼羅 性身」。三昧耶曼荼羅是大曼荼羅之所受用故、名」受用身」。 身之所受用法故、 略)…大曼荼羅亦名||法身||。此之法身即自性身故、 名,,自性身,。法曼荼羅是大曼荼羅

|変化身| 。三昧耶曼荼羅平等流類義故、名||等流身| 。…

中

名,,変化身,。羯磨曼荼羅是業用即等流故、 西曼義口決』(弘全四·二六五~二六六頁) 名,,受用身,。大曼荼羅是整五大色所変故、 名,,等流身,。

33 『教時問答』巻四(大正七五・四三七頁下~四三八頁中)

35 [四曼義口決] (弘全四二六二~二六三頁) 34

[四曼義口決]

(弘全四・二五九~二六二頁)

51

安然と『釈摩訶衍論』との関係性については、武覚超「日

本天台における『釋摩訶衍論』の受容について―五大院安

37 36 |四曼義口決| **四曼義口決** (弘全四・二六五~二六六頁) (弘全四・二六三~二六四頁)

38 |四曼義口決| (弘全四・二六六~二六七頁)

39 [四曼義口決] (弘全四・二六八頁

40 「菩提心義抄』巻二 (大正七五・四七四頁上~中)

41 『金剛界大法対受記』巻八(大正七五·一九八頁上]

42 『教時問答』巻一(大正七五・三八六頁上)

43 『菩提心義抄』巻一(大正七五・四七二頁上~中

45 更に言うならば、安然が所持していたのは、正本・異本『即 この現存していない『即身成仏義』と、『四種曼荼羅義 の思想が含まれる『即身成仏義』とが同じものなのか、そ れとも別のものなのか、この判断をつけることはできない。

> まとめられた形、 のであったとも推測できるのである。 曼荼羅義文字実相義一巻」と記された、空海撰述集的なも 身義』・『四種曼荼羅義』・『声字実相義(文字実相義)』が つまり、 外題に「真言宗即身成仏義四種

『守護国界章』巻上之中(大正七四・一六二頁中)。詳細に 『教時問答』巻一(大正七五·三九二頁中)

47 46

『教時問答』巻一(大正七五·三九〇頁中 ついては註51参照。

48

『教時問答』巻一(大正七五・三七四頁下

50 49 『教時問答』巻一(大正七五·三七五頁上~中)

52 が挙げられる。 然を中心に―」(『天台学報』二六)等、参照 『釈摩訶衍論』を空海と同時代に用いた学匠として、 釈摩訶衍論』を用い、それを最澄は、『守護国界章』巻上 徳一は、現存していない『中辺義鏡』

にて

所」立四教、 何名,,聖位,。若是蔵通別菩薩非,,円教,者、 生性障等十障 | 得 | 十地 | 。準 | 此等文 | 明知。地前四十 得||十行位|。伏||縁覚捨心障||得||十迴向位|。 位 | 。伏 | | 外道著我障 | 得 | | 十住位 | 。伏 | | 声聞畏苦障 **麁食者曰、又釈摩訶衍論云、伏||闡提不信障** 猶是凡夫、 不1.極成1故。 猶是退位。 彈曰、 於||六塵境||顛倒忘念。 汝引||釈摩訶衍論|。 不」か。 断 異

筆したという論考もあるのであり、

問題を存している。

またこの『釈摩訶衍論』の引用は、徳一以降に何者かが加は『釈摩訶衍論』に引かれる『大乗起信論』の文であり、八六三頁下)にも『釈摩訶衍論』が引かれているが、これ八六三頁下)にも『釈摩訶衍論』が引かれているが、これと引用したうえで、『釈摩訶衍論』を用いて天台を批判すと引用したうえで、『釈摩訶衍論』を用いて天台を批判すと引用したうえで、『釈摩訶衍論』を用いて天台を批判する徳一の主張を退けている。